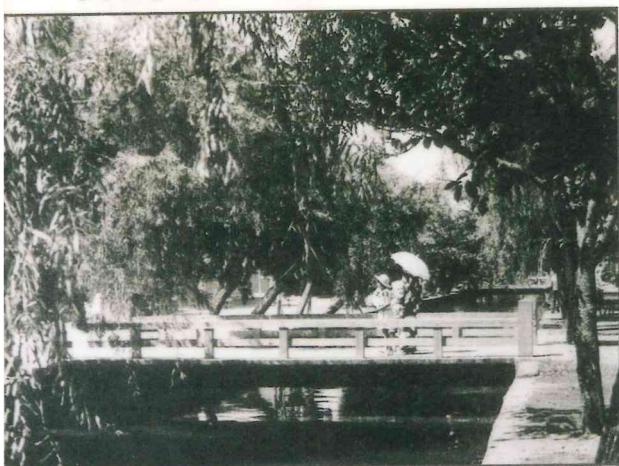


新潟歴史双書 5

新潟市

新潟の堀と橋



◎ 西堀に架かる橋 昭和前期 新潟市郷土資料館所蔵

53

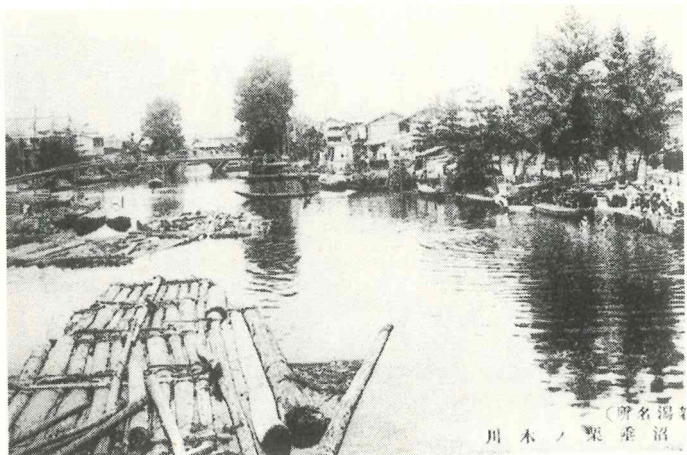


図61 活気があった栗ノ木川

活気があった栗ノ木川

亀田郷の中央を流れる栗ノ木川は、沼垂の町の中を流れて信濃川に流れ出ていた。図は、町の中を流れる栗ノ木川の昭和初期の様子である。図の左手にはいかだが多く写っている。川沿いには製材所や材木屋が並んでいた。右手には岸につながれた舟や、対岸に向かう舟が写っている。また、洗濯をする人や、川に入って遊んでいる子供も見える。川は活気に満ちていた。奥に見える木橋は、ゆるやかな太鼓橋である。栗ノ木川には、「こうれんぼう」という長舟よりも大きな舟が通ったので、高い橋脚が必要であった。



図62 人けのない栗ノ木川

人けのない栗ノ木川

自動車が普及するにつれ、川舟の往来は少なくなっていた。図は、昭和三十年代に栗ノ木橋から上流を見た風景である。栗ノ木橋は新潟駅前土地区画整理事業に伴って新たに開設された明石通（新国道七号）の橋として、昭和三十三年に蒲原橋上流に架けられた。

栗ノ木川の護岸は石積みに整備され、岸辺は駐車場に使われている。河渡に小舟が数隻つながれているが、川にも岸にも人の姿がない。奥に長嶺橋、その左に沼垂白山神社の屋根が見える。

い、浸水した。地盤沈下で海拔より低くなっていた地域では、堤防が仮止めされ、ポンプで水がくみ出されるまで、水が引かなかつた。床上浸水した市内の家は一万世帯を超えた。

地震の復興計画の中では、この東新潟の海拔ゼロメートル以下の地帯を水から守ることが課題の一つになった。河川の堤防を堅固にするため、矢板を打ち、堤防を高く広くした。その上で、東新潟を流れる河川の水位を周辺の地域より下げて、そこへ周囲から排水できるようにすることにした。四十二年三月、通船川は山の下閘門^{こうもん}で締め切られ、閘門の排水機場で信濃川へ排水されるようになった。

亀田郷の排水は、それまで栗ノ木川排水機場で栗ノ木川と新栗ノ木川に排水してきた。しかし、地震で郷内がさらに沈下したこともあって、その方式では低水位は実現できなかった。そのため、この地域の水は、鳥屋野潟から新しい排水路を親松まで通し、親松に排水機場を設けて、そこから信濃川へ排水することにした。親松排水機場は四十三年一月に完成した。

栗ノ木川の埋め立て

栗ノ木川の下流は埋めることになった。既に三十九年八月には沼垂地区の住民が、水害防止のために栗ノ木川の埋め立てを県や市に陳情していた。四十二年十一月、川はせき止められ、水が引いて底を見せた川に排水管を敷設する工事が始まった。

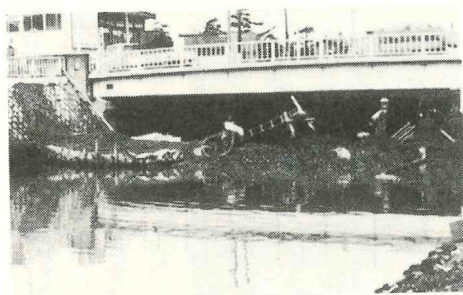


図71 水が引いた栗ノ木川 栗ノ木橋付近

四十二年から四十四年にかけて、鳥屋野潟から笹出線笹越橋までの間の栗ノ木川は、新栗ノ木川につながる水路を残して埋められた。笹越橋の下流は長く水のない川になっていたが、道路化工事が四十五年になって始まり、四十八年十二月に一部が開通した。この道路は、開通したばかりの新潟バイパス・亀田バイパスに接続する道路であり、当時計画されていた、万代橋下流橋「みなと大橋」につながる予定の道路として、重要な

役割を与えられていた。

昭和三十年代から四十年代にかけて、農村部にあった用排水路もコンクリートや矢板の護岸になった。宅地化が進んだ所では、堀に落ちないようにコンクリートのふたをしたり、金網のフェンスを張って堀に近付けないようにした。ついには、農業用排水路は生活排水路となり、道路の下に暗渠に変わっていった。市民の日常の視野や活動の場から水面は消えた。水を意識しない生活が、残された水をますます汚染していった。

地震復興と河川

昭和三十九年六月十六日、新潟地震が発生した。地面は割れ、波打ち、水や砂が吹き出した。ビルが倒れ、橋が壊れた。石油タンクが炎上し、多くの民家が燃えた。堤防が壊れ、津波が襲

りいつぱいに民謡流しが行われた。



図70 西堀の排水管敷設工事

をひかえ、早急に整備の具体的方策を樹立願う意味において「全員一致で採択した。同年十二月から西堀の排水管敷設工事が始まり、堀幅の半分が埋まった。三十八年度には、埋めたままになっていた跡地を道路にする工事とともに、六月には西堀の全面的な埋め立てが開始された。七月には他門川の埋め立ても始まった。一番堀・宮浦堀の埋め立てには、白山神社が境内地の風致を保てないと反対した。十二月になって築地塀^{つじい}を設けることで話し合いが付き、翌三十九年一月から埋め立てが実施された。西堀や一番堀・宮浦堀は三十九年五月には埋め立てが済んで、他の堀跡とともに道路になった。六月五日の国体前夜祭では、西堀の通

新潟歴史双書 5

新潟の堀と橋

平成十三年（二〇〇一年）三月三十日発行

●編集発行……新潟市

〒九五・八五五〇

新潟市学校町通一番町六〇二番地一

●印刷……（株）文久堂

〒九五・八〇五二

新潟市新島町通四ノ町三三四二乙